

転居された方は事務局 (svcf-admin@svcf.jp) まで転居先をお知らせください

ZOOM集会「ふくしま再生の会の挑戦に学ぶ」開催報告

6月29日(火)、福島県飯舘村を拠点に、福島第一原子力発電所事故後の自然と人間との関係の問い直しを目指し、農業/農村コミュニティの再生に向け各種のプロジェクト等に取り組んでおられる「ふくしま再生の会」の田尾陽一理事長を講師に迎えて、以下の通り討論集会を開催しました。

集会はWEB上(ZOOM)で行われ、田尾さんを含め18名が参加し、あらかじめ行動隊から田尾さんに宛てた質問を軸に、質疑の形で行われました。

質問1 「ふくしま再生の会(以下「再生の会」)
はい飯舘村を拠点として、農業再生のためのパイロットプロジェクト等に取り組んでこられました。そのことが「東京電力福島第一原子力発電所の事故によって破壊された生活と産業の再生」という団体の設立目的に対してどのように活かされていますか。



田尾:最初から飯舘村を拠点と定めていたわけではありません。また農業再生のためのパイロットプロジェクトだけに取り組んできたわけでもありません。

2011年6月、福島第一原子力発電所(以下、「イチエフ」)事故が現代日本の最大の危機だという認識で一致した仲間16人で、とにかく現場に行ってみようということで小名浜、相馬、南相馬、全村避難前の飯舘と巡りました。

6月6日、飯舘で菅野宗夫さん(報告者注:循環型農業を営んでいた専業農家、現「再生の会」副理事長)に出会い、ご自身のこと、地域のこと、国等の支援の実態などについて話しを交わしました。

(報告者注:田尾さんはこのとき、宗夫さんが、イチエフ事故について、「明確な人災であり、原発は事故を収束させる技術を持っているべきであり、村民が村に戻り安心して農業を営み生活できる施策を取るべきである」という趣旨の講演をされていたことを知ります《田尾陽一『飯舘村からの挑戦』》)

しかし、全村避難となれば外部の人間がやれることはないなと思ったのですが、宗夫さんが、田尾さんたちが村に来られるなら、自分は毎週避難先から村に戻り一緒に行動すると言われ、後に引けなくなったわけです。

私たちは東京に戻り、3人の発起人で、「原発事故によって破壊された地域(飯舘村)を対象に、『自立して思考する諸個人』が、『現地で/継続して/協働して/事実を基にして』活動し、『新しい公共空間の創造』を現実化する努力を行う」という活動原則と、福島復興に向けた調査、実験、交流、行動を行うという活動内容を定め「ふくしま再生の会」を立ち上げたわけです。

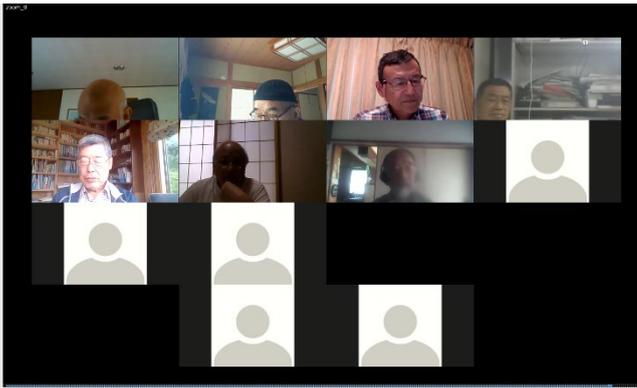
それ以来これらの原則に沿って活動してきたつもりですが、現在、飯舘村を主なフィールドにしているのは、それ以上のゆとりがないという実情でもありますが、発信・交流は国内、さらに世界に向けています。

福島原発行動隊(以下、「行動隊」):「再生の会」は、原発事故によって破壊された地域(飯舘村)を対象に、「新しい公共空間の創造」を目指しているわけですが、「行動隊」はイチエフに飛び込み、若い世代に代わって事故収束作業に従事することを目的としてきました。しかし事故後10年間、そのような場面はありませんでした。行動隊は行動目的を整理し、次の展望を開くべきだと思うのですが、田尾さんはどう考えられるでしょうか。

田尾:「行動隊」が活動のターゲットを事故を起こしたイチエフそのものに定めたのに対し、「再生の会」はターゲットを、破壊され被害を受けたイチエフの外側に定めた点が異なると思います。

行動隊:若い世代に代わって事故原発の収束作業

「再生の会」は当面の目標をどこに置いておられるのでしょうか？



田尾:飯舘村は2017年3月に長泥地区を除き避難指示が解除され、現在、飯舘村にはおよそ1400人の村民が戻ってきています。(報告者注:この年、田尾さんも都内から飯舘村に移住)そのほとんどは自家菜園で生きがいとして農業を行う高齢者ですが、数は少ないけれど先進的な農業を目指す人たちもいます。

また、Uターンも含めてですが182人の新たな移住者がいます。上昇志向の都会での生活を見限った若い世代で、女性も多い。アーティスト、夫婦もいる。彼らはいいセンスをしています。

彼ら自身が企画し運営したオンラインフォーラムがありました。村長も私も参加したのですが、彼らはフォーラムで、飯舘村の10年後のイメージを求めました。例えば、食えるならば、あるいは10年後にSDGs(報告者注:持続可能な開発目標)を達成するならば移住する。それができなければ移住はしない等ははっきりした主張を持っています。

「再生の会」は、これらの農業者、若い世代が飯舘村で食べていけるように徹底的にサポートしていきます。

また、農業を多くの部分で支えてきたのは女性なのに村役場の職員、会合における代表等村の構造は男性中心です。そのような村に降ってきた原発事故は古い男中心の村を揺さぶり、男性中心の構造に亀裂を生じさせています。

行動隊:「行動隊」は、終始、目標を自分たち自身が行動することに置いてきました。若い人をサポートするという点では「再生の会」に学ぶべきところがあると思いました。

行動隊:村民自身の復興のイメージは、事故前の静かな生活を取り戻すことなのでしょうか、国などが作る立派な箱モノなどを受け入れていくということなのでしょうか。

私は村民自身が中身を決める村興しであるべきと考えますが。

田尾:おっしゃる通りです。

しかし、飯舘村はただ静かな山村であったわけではなく、循環型農業の積極的な導入等、事故前から、集落ごとにアクティブな動きのあった土地柄でもあります。(報告者注:飯舘村は原発事故による全村避難以前から「まていの村」を標榜してきました《まてい:福島方言で「手間暇を惜しまず 丁寧に」の意》)。

「再生の会」のある佐須地区は、事故前の16戸のうち10数戸が帰村しています。他方、帰村者が4、5人の地区もあります。住民4、5人の集落では祭り、草刈りなどのイベントをはじめコミュニティーとして成り立つのは難しいと思います。

佐須地区では、現在は草刈りなどのイベントへの参加者には補助金による日当が出、村外に居住している村民も参加していますが、補助金が打ち切られれば今のように集まらなくなることが考えられます。

現状では高齢の村民、先進的な農業を目指す農業者、移住者それぞれがコミュニティーについてバラバラなイメージを抱いています。

そこで、「再生の会」では村民の動きをにらみながら、各層が団結できるよう切り口を工夫したイベントを提案しています。

例えば、全国的にDIYチェーンを展開している株式会社コメリの協力による、廃屋を利用したコメリ空間の創造です。テナントの募集やプレ・イベントを企画しています。ここをコミュニティー創造の実験室にしていきたい。

移住してきたアーティストからは、ロボット型のカボチャ作り、ヒョウタン素材の水筒の量産案などが出され、これに「おもしろエ」と乗るジイちゃんもいたり結構エネルギーはあります。

質問4 再生の会における活動の活性化を図る工夫があれば、ご紹介ください。

質問5 再生の会における次世代会員の確保(育成)に関する工夫としてどんなことをされていますか？

田尾:「再生の会」では、コメリ空間の他、山地再生チームが、山地牧場などを構想しています。山地牧場というのは山地で牛や山羊を放牧し山地の再生を目指すもので、先行例もあります。

また、イチエフ事故により中断しているあぶくまロマンチック街道構想の再前進を目指したい。

あぶくまロマンチック街道というのは、飯舘村・浪江町・津島・葛尾村・田村市都路・川内村を結ぶ山並みの国道399号線です。沿線は素晴らしい星空と豊かな食文化を有しています。

現在浪江町の部分が帰還困難区域にかかっています。

すが、自然の再生を、飯館村という点からあぶくまロマンチック街道という線へ、さらに大熊町などの沿岸地域を含めた面へ広げていくためには重要な線です。地元の動きが出てくれば県も支援すると言っています。



しかし、まずはロマンチック街道周辺の汚染状況の調査からです。

行動隊:「行動隊」のモニタリング活動については、協定を結んでいる川内村でも個人からの要請が無くなっています。そのような調査活動には加わっていき

たいと思います。

田尾:飯館村では、2012年から「再生の会」の肝いりで、村民自身による放射能測定が展開されてきました。2014年からは、軽ワゴン2台にKEKが提供してくれた放射能測定・通信システムを載せ、40名の村民自身が村内を定期的に測定し、そのデータをKEKが解析し、分かりやすいパンフレットにして村民に配布してきました。ところが2020年3月にこの事業に対する村の予算が打ち切られてしまいました。「再生の会」ではボランティアによる長泥地区の測定は続けていますが、この測定車の有効な利用方法を検討中です。

飯館村村外でも、ロマンチック街道の東側、浪江町から大熊町の沿岸地域を年3回巡回測定していますが、「行動隊」でこの測定車を使い沿岸地域の測定を試みたらどうでしょうか。

行動隊:最近、大熊町住民の協力を得て、中間貯蔵施設を含む帰還困難区域で「行動隊」の線量計で放射線測定を試みたところですが、数か月に一度の測定でも意味があるでしょうか。

田尾:沿岸部の放射能測定は意義があると思います。

行動隊:今日は「再生の会」の活動の紹介、「行動隊」への提案ありがとうございました。

8月までの行動計画

<第104回院内集会>

日時：未定

会場：未定

演題：福島復興策、廃炉事業の進展に関わる各党の方針・判断を聞く

講師：国民民主党国会議員に折衝中です。

<SVCF通信137号> 8月18日(水) 発行予定

<連絡会議>

(右地図参照)

以下の各金曜日10:30から淡路町事務所

7月16日、23日、30日

8月6日、13日、20日、27日

